



# 株式会社ワイテック

## マツダのグローバル戦略に同期し 災害・障害対策を2度にわたり強化

### ヴァインクスのツール導入によりハイブリッドなデータ保全を実施

#### メキシコの新工場スタートに伴い 災害・障害対策を強化

マツダ向け車体部品（シャーシ、ボディ）のトップメーカーであるワイテックは、2014年1月にメキシコ・サラマンカにある新工場で操業を開始した。マツダのメキシコ新工場の量産開始に同期させたもので、この時点からワイテックの災害・障害対策は新たなステージに入った。

マツダのメキシコ新工場は、同社のグローバル戦略における最大の拠点で、最新鋭の生産設備を備えた工場である。ワイテックの新工場は、そのマツダの新工場に隣接する「サプライヤーパーク」にあり、文字どおり、両社一体の生産をめざす工場である。

そのワイテックのメキシコ用の基幹システムは、当時、日本の本社内で国内用基幹システムを稼働させていたIBM i (Power 520) 上に搭載した。Infor ERP LX (ERP ツール) をベースにした基幹システムで、メキシコからはグローバル回線を使って利用する形態である。メキシコ用と国内用の基幹システムは、LPARで分けずに、同一区画に配置した。

同社では従来、テープによる日次バックアップを実施してきた。しかし、毎日の運用負荷が大きいことと、それに加えて、バックアップテープを本番機と同じ場所に保管していることや、テープ媒体の劣化などに不安を抱えてきた

という。

最初に実施した基幹システムの災害・障害対策は、ヴァインクスの「Hybrid BACKUP」を使ったPCサーバーへのバックアップである。基幹システムと同一ロケーションにあるPCサーバーへバックアップを行い、そのバックアップデータを、さらにロケーションの離れたデータセンター内のPCサーバーへFTPで転送するというシステムを組んだ。それぞれのバックアップは、1日1回、夜間バッチで行うこととした。

「テープを遠隔地へ保管することも検討しましたが、それも日々の運用がたいへんで、最終的に手動オペレーションが不要なディスク to ディスクのバックアップを採用しました。過去のデータを利用したいときに、すぐに探し出せる点もディスクへのバックアップを採用した理由の1つです」と、総務部 情報システムグループの谷本敏昭マネージャーはHybrid BACKUP採用の理由を語る。

利用開始は、メキシコ工場が稼働を開始する4カ月前の2013年9月で、初めに国内用基幹システムのバックアップをスタートさせ、2014年1月からメキシコ用のバックアップも開始した。

#### 新たにIBM iを導入し リアルタイム同期を実施

その後、メキシコ工場の生産量が大きく伸び、障害や災害によるシステム停止の影響が広がったため、抜本的な災害・障害対策の必要性が高まってきた。

「基幹システムで障害が発生したとき、1日1回のバックアップではデータを障害時点にまで戻すのは簡単ではありません。それも国内用ならまだしも、メキシコ用の基幹システムに何かあったときは、言葉の壁や現地IT要員の不足、時差の問題などがあるため、非常に困難です。そこで、バックアップを超える災害・障害対策の検討に着手しました」（谷本氏）



谷本 敏昭氏

総務部  
情報システムグループ  
マネージャー

POINT

- テープからD2Dバックアップへ切り替え
- Hybrid SYNCによりリアルタイム同期を実施
- D2Dバックアップとリアルタイム同期の2重構成

TIME LINE

- 2013年：国内本番機のバックアップ開始
- 2014年：メキシコ本番機のバックアップ開始
- 2016年：Hybrid SYNCによる国内／メキシコのHA開始

COMPANY PROFILE

本 社：広島県安芸郡  
 設 立：1960年  
 資 本 金：8960万円  
 売 上 高：542億円(2014年度実績)  
 従業員数：1023名(2015年4月)  
 事業内容：自動車部品製造、金型設計製作および組立  
 治具設計製作  
<http://www.ytec-gr.co.jp/>

このとき、クラウドについても検討した。多数のベンダーから資料を取り寄せ、基幹システムをクラウド化した場合の仕様を細かく分析したが、「オンプレミスと比較すると、費用の点でやや予想を上回り、今回は見送ることにしました」と、谷本氏は振り返る。

新しい災害・障害対策用として採用したのは、ウィンクスの「Hybrid SYNC」である。そしてこれに合わせてIBM i (Power 720) を2台同時に、新規に導入している。1台は、データセンターに配置する国内基幹システム用、もう1台は本社側に置くバックアップ用である。

Hybrid SYNCを採用した理由について谷本氏は、「同じシリーズのHybrid BACKUPを2年半ほど利用して、その機能と使いやすさを高く評価していたのと、操作方法に共通要素が多く、サポート窓口が同じなどの利便性を考慮して採用しました」と説明する。

新しい災害・障害対策システムは、Hybrid SYNCを使って国内用とメキシコ用の基幹システムから本社内のバックアップ機へリアルタイムにレプリケーションし、それと

は別に、それぞれの基幹システムから同一ロケーションのPCサーバーへHybrid BACKUPによりバックアップする構成である。システムに障害が起きたときのバックアップ機への切り替え時間は、「30分以内」という想定である。

現在は、基幹システムからバックアップ機への切り替え運用は国内用のみとし、メキシコ用については切り替えを前提としないリアルタイム同期を実施している。

今後については、バックアップ用のIBM iをもう1台、新たに導入し、国内用とメキシコ用のそれぞれで切り替え運用が可能なシステムを構想している。

「本来は、メキシコ用基幹システムもデータセンターに配置するのが理想ですが、本社のIBM i上で先に稼働させたので、データセンターへの移設となると、日本とメキシコ側の双方で環境の再設定が必要になるため、現在は断念しています。いずれ時期を見て、実施する予定です」と、谷本氏は述べる。①

図表1 IBM iシステムのバックアップ構成

